

ふれあひ人。

おおたか しょうへい
大高 将平さん
社会福祉法人 木犀会
ケアステーション・モリヤ モリヤキッズ
児童指導員



社会福祉法人木犀会は、茨城県内各地で福祉施設・事業所を展開しています。ケアステーション・モリヤもその一つで、18歳から65歳までの知的・精神・身体・高次脳機能障害のある方へ自立訓練（生活訓練）・生活介護の多機能型サービスを提供するとともに、小学生以上を対象とした放課後等デイサービスを提供しています。大高さんは、放課後等デイサービスのモリヤキッズに児童指導員として勤務。小・中・高校に通う子どもたちに対して、学校が終わる3時半から5時までの間、様々な支援をしています。「学習が苦手な子に学習の仕方を教えたり、手先がうまく使えない子にハサミの使い方や字の書き方のトレーニングをしたりしています。どんな活動にもルールがあるので、それを場面に応じて教えていくことも仕事です」と話します。

きっかけは、大学生時代のボランティア活動

大高さんが福祉の仕事に就いたきっかけは、大学生時代に教授の紹介でグループホームのボランティア活動をしたことから。そこで様々な障害のある子どもたちと関わりました。「10日間のボランティアだったのですが、同じ空間で生活してみて、最初は何を話していいかわかりませんでした。子どもたちがどういう言葉を発し、どういう行動をするのが全くわからなかったからです。手探り状態で、自分なりにいろいろ模索しながら話をして、共通の趣味とかから関わっていった、同じ時間を過ごすうちにいろいろな話が聞けるようになりました」と当時を振り返ります。様々な環境で育った子どもたちに直面し、想像以上の悩みや苦勞を抱えていることを知った大高さんは、子どもたちのた

経験をもとに、まずは行動することがモットーです



めに何かできることはないかと考え始めました。ボランティアの最終日に、「今日まで接してくれてありがとう」「楽しかったよ」という子どもたちの声を聞いて、「ありがとうと言ってもらえたことが、自分が役に立った、力になることができた」と思えた大高さんは、その時から障害者や福祉の仕事に興味を持つようになりました。

福祉の仕事のスタートは、福祉作業所から

福祉の仕事の第一歩は、就労継続支援B型事業所からでしたが、多機能型の事業所のため子どもたちの放課後等デイサービスもありました。「子どもと関わることに、やりがいを感じ、楽しいと思えたので、放課後等デイサービスの方をメインでやらせてもらえるように相談しました」と大高さん。その事業所に勤務して4年目に差し掛かり、仕事も充実してきたところですが、「このままここにいることが自分にとっての成長になるのだろうか」と考えた時期でもありました。

そんな中、テレビ番組で海外の辺境に移住した家族の特集を見て、「自分も新しい場所で1から挑戦したい」と強く思うようになり、現在の職場に移りました。児童指導員として4年がたち、児童指導員としてのキャリアは8年目になります。



やりがいと魅力は「ありがとう」の言葉

仕事のやりがいをたずねると、「子どもたちが、今までできなかったことができるようになった時や、教えたことが身についてきたと感じた時にやりがいを感じます。また、だんだん子どもたちの反応が明るくなり、保護者の理解も得られるようになり、「いつもありがとう」という言葉が聞けるようになると、信頼してもらえたなどわかるし、この仕事をしていて良かったと思えます」と話してくれました。大切なのはそれぞれの子どもに応じた対応、と言う大高さん。悩んだ時には、長年保育士をし

ていた経験豊富なスタッフにアドバイスをもらったり、体調面については自分で伝えられない子どもたちもいるので看護師のスタッフに相談し、子どもたちの状態をこまめに共有しているとのこと。



福祉の仕事の魅力は、「ありがとうの言葉が返ってくることです。子どもが好きなので、教えたことが身について成長していくのを見られることも魅力です」と大高さん。今後の目標は、まずはサービス管理責任者等研修を受けること。そして将来的には、子どもたちの施設の立ち上げから運営・管理に関わっていくことで、「子どもたちが安心して過ごせる、家庭、学校に次ぐ第3の居場所づくりをしたい」と意欲的です。

頭で考えるより、体験することが大事

福祉の仕事に興味はあるが迷っている方へのメッセージは、「私自身、思っていたのと全然違っていましたが、まずは一回考えずにやってみよう。頭で考えていても前へは進まないの、一歩踏み出して、体験をもとに考えてもいいと思います。やってみて続けられそうかどうか決めてもいい。人と関わる仕事なので、頭で考えるよりも関わってみないとわかりません。まずは体験することが大事です」という心強い言葉でした。

